©日本カムリ学会 2006
Cylchlythyr 5:10-14

[Memorabilia]

—Pethau Cofiadwy mewn Astudiaethau Cymraeg—

Rhif 4: 水谷宏「ネギ（Cennin）か、水仙（Cennin Pedr）か」

本号は３月号とのことで、Dydd Gŵyl Ddewi に因んだこの主題を選んだ。カムリの国に興味を抱いている方々には、関心の深い主題である。

昨日、高知での「ソメイヨシノ」の開花の知らせが入った。この桜の一種は、日本の「国花」というよりは、東京都の「都花」であり、染井村（現在の豊島区巣鴨）から広まったので、明治初年に命名されたという（学習研究社「新世紀ビジュアル大辞典」）。広辞苑によれば、日本の「国花」は、「桜」または「菊」とあり、「日本で、桜の花の異称」となっている。従って、「桜」であればどんな種類でもいい、「菊」とともに、日本の「国花」なのである。しかし、どのような経緯でそうなったのか、また、いつの時代にそう「決められた」のかは、この種の国語辞典では分からない。詮索を続ければ、それなりのことははっきりするかも知れないが、果たして「史的根拠」と言える証拠が集められるのかは不明だが、専門の方のご指導を仰ぐ他ない。

©日本カムリ学会 2006
Cylchlythyr 5:10-14

カムリでは、守護聖人デウイの祝日３月１日に、帽子や胸に飾るのはネギなのか水仙なのか、が問題になることがある。そして、母親が娘に、胸に飾るのは水仙ではなくネギなのだと教える話については、本誌２号（昨年４月25日出版され、当初は、１号別刷りとして出版された）で触れた。事の始まりは、19世紀半ばに遡るようである。*Archaeologia Cambrensis* 第３号(3rd Series, 1857:399-401）に、編集者宛、'Origin of the Welsh Leek' という一文が、Brecon に住む J. Joseph という人から寄せられた。その前号で 'the real origin of the Welsh leek' についての情報提供を求められたのに対しての回答として寄せられたものである。参考になればとのことで、"The Praise of St. David's Day, shewing the reason why the Welshmen honour the Leeke on that Day" というタイトルのバラードが紹介されている。その詩によれば、デウイの言いつけで、敵味方の区別のためにネギを付けて敵と戦って勝ったことが、そもそもの始まりであると歌っている。そして、この詩には第２部があり、それには、王室の皇太子たちや、Henry VIIも Elizabeth もネギを付けて祝っているので、'Royal Leeke'（詩では、ネギは 'leeke' と綴られている）と呼ぶべきだと歌う。そして、詩の後には、*Cambro-Briton*, ii: 182 からの 'The Leek' の一文も添えられ、３月１日にネギを付けるというこの習慣の真の起源は不明でありが、詮索は続いている。サクソン人との戦いで、デウイの命令で付けたという説のほか、Cadwallawn がネギ畑の近くで戦った説、さらには、Owen Pughe の説として、'Cymmortha'（助け合い）の習慣に起源を求め、農夫たちが農作業を助け合いで済ませた後、ネギを食したことに因んでいるという説もあるという。

J. Joseph（「1857年７月３日 Brecon にて」、と記されている以外、この人物については、*Dictionary of Welsh Biography, down to 1940* を調べては見たが、詳しいことは分からない）のこの一文は、あくまでもなぜカムリの人達がネギで飾ってデウイの祝日を祝うか、についての資料提供であり、水仙に関する記述は一切ない。とすれば、19世紀の半ばごろでは、まだ、ネギの他に水仙を付けるカムリの人はいなかったのではないかと推測できるのである。しかし、20世紀に入ると事情が少し異なってくるのである。The Story of the Nations のシリーズに含まれている O.M. Edwards (1902) の *Wales* という書物の索引 'Leek' の項 (p. 413) には、'Some take the daffodil as the national flower. The Welsh word *cennhinenn*, pl., *cennin*, is the same for both' という記述が見られるようになってくる。しかし、本文の記述では、あくまでもカムリの国の National Emblem はネギだとの見解に基づいている。即ち、同じ「国章」といっても、架空の動物である「赤き龍」the red dragon の起源にまつわる意味づけは、*Lludd a Llevelys* の物語にも現われており、古くからこの国の「伝説」に扱われてはいるものの、Cressy での勝利という歴史的事件に求めているのに対して、ネギのほうは、「Henry Vの勝利」にまつわる「伝説」に起源が求められている（同書 p. 255）。従って、執筆者である Edwards の念頭には、National Emblem は「赤き龍」と「ネギ」だけがあり、「水仙」は「国章」ではなく、日本の「桜」のような「国花」だったはずである。

さて、正面きってこの問題—カムリの国の「国章」は、ネギではなく水仙だとの

©日本カムリ学会 2006
Cylchlythyr 5:10-14

主張—を論じたものは、手元にある文献資料に関する限り、 Ivor B. John (1907): 'The National Emblem of Wales', *Transactions of the Honourable Society of Cymmrodorion*, Session 1906-1907: 52-75 である。1907年２月21日に Ellis J. Griffith が司会を務めた講演の詳細であるが、この協会の当時の代表幹事だった Vincent Evans の忠告に先ず言及している。即ち、「（この主張をするには）できれば新しい史的証拠を示すのが望ましい」ということだが、「国章」の起源を論じる場合には、「史的証拠」よりも、「可能性」の有無 'questions of possibility and impossibility' (p. 53)、「あり得るのか否か」'probability and improbability' の問題だとして、「戦勝」という歴史的事件に含まれている「不可能性」を指摘して、ネギが「国章」であり得ることなどは考えられないと、強力に主張しているのである。

しばしば引き合いにだされることの多い Shakespeare の *Henry V*, Act 4, Sc. 7 の話も、虚構に過ぎない（King Henry は実在だが、Fluellen は Shakespeare が作り出した人物（a character of Shakespeare's own invention）だと指摘）、「ものの本」'chronicles' を読んだというが、Holinshed's *Chronicles* には、Fluellen の言う「戦」など出てこない、と一蹴している。（ついでながら、日本語訳の「ヘンリー五世」のこのくだりでは、'leek' は「ネギ」ではなく「韮」（にら）となっているものもある。）

デウイの忠告でネギを付けて勝利したとされる戦は、デウイが死んだ西暦 601 年以後何十年も後のことであり、デウイが忠告することなど「あり得ない」と主張している。平和主義者のデウイが戦でネギをつけることを勧めたとする「伝説」よりも、水仙のほうが花を愛するデウイには、はるかに自然な解釈だとする。そして、一方、カムライグ語の 'cennin'（単数形は cenhinen）は多義語であり、一般的に「ネギ」（Cennin cyffredin, common leeks）を意味すると共に、「野生のヒヤシンス」(Cennin y brain, wild hyasinths)「水仙」(Cennin Gwinwydd, daffodils, Cennin Pedr, daffodils)「にんにく」(Cennin Ewinog, garlic) などの植物を指す。従って、'cennin' の英訳に際しては、'leeks' とせずに 'daffodils'としておけば、このような「誤解」は生じなかったと主張しているのである。Taliessin の詩を英訳する場合でも、"Adfwyn lluarth pan llwyd y genin" を、Skene のように "Pleasant is the camp when the leek flourishes"ではなく、'lluarth' (camp) を 'llyarth' (bank, or slope) と採り、"Pleasant is the bank when daffodils flourish' とすれば問題はなかったとの主張を展開している。

執筆者 John 氏も指摘しているように、これだけの「水仙擁護論」が展開された背景には、当時、３月１日にはネギではなく水仙を身につけて祝うカムロの人々が相当存在していて、上記の Brecon の住人 J. Joseph の生きた時代、19世紀半ばごろとは、社会事情が大きく変化していたことを窺い知ることもできようか。

もう一つの重要な論文は、Ivor B. John の「水仙擁護論」からほぼ 10 年後の Arthur E. Hughes (1916): 'The Welsh National Emblem: Leek or Daffodil?' であり、同じく The Honourable Society of Cymmrodorion の *Y Cymmrodor* 26号に

©日本カムリ学会 2006
Cylchlythyr 5:10-14

発表された「ネギ擁護論」である。この論文には、前述の同協会代表幹事だったVincent Evans のコメントが添えられていて、"Welsh National Festival" が St. David's Day の前夜、ロンドンの St. Paul寺院で開催され、集まった会員の集会で、「委員会」が任命されて「Welsh National Emblemはネギか水仙か」追求することになったとある。この論文に集められた「証拠」は、筆者であり協会の評議員の一人である Arthur E. Hughes （ロンドンの法学院 Gray's Inn に所属する弁護士）の手によるものであり、この「報告」も彼自身の手によって書かれたとある。協会としては、10 年前の Ivor B. John の「水仙擁護論」をも、ここに発表されている Arthur E. Hughes の「ネギ擁護論」のいずれをも採択した訳ではなく、ウェールズの歴史の真実の追及が目的だと宣言しているのである。

まず、皇帝ネロがネギを好んで食べていたことと、カムリには野生のネギがあったとの証拠がない点、そして、カムライグ語 'cennhinen' とラテン語 'porrus' とは結びつかない点からも、カムリには、占領時代にローマ人が持ち込んだという説を採用。しかし、同族語が他のケルト諸語のほとんどに見られるところから、ケルト人はローマ人に出会う前からネギを知っていたと言う。

一方、水仙も、北ヨーロッパのほぼ全域に広まっていて、カムライグ語方言では、'Cenin Dewi', 'Blodau Dewi' などとも呼ばれることもあるが、'Cennin Pedr' がもっとも一般的な呼称だとしている。従って、「水仙擁護論」が主張するような、ネギと水仙との取り違えなど、カムライグ語の話し手にはあり得ないと説いている。そして、美的センスの観点から、国章としてネギのようなものを選ぶ民族はいないという主張に対しては、ネギは美しい花であり、画家の中にはその葉の強い線に美と優雅さを認める人もいると反論している。

次いで、Red Book of Hergest (13世紀末～14世紀初頭) に含まれている'Meddygon Myddfai' (カムリの国の古い医学書) という写本に書かれているネギの効用を引用して、傷や骨を癒すということから、戦と関連する「ネギ擁護論」は一理あり、と主張している。また、ハウエル善王 Hywel Dda の法律でも、ネギは大事な作物として扱われており、野生の動物に荒らされないよう塀を巡らせて守るようにとの記述があることを紹介している。そして、王室でも、ネギと水仙とが混同されるようなことはなく、カムリの国の国章として認知されている事実を指摘している。

さて、デウイの祝日に纏わる習慣の起源は定かではないが、他の国の国章の起源と同様に、伝説によって伝えられてきた説に従う他はないとして、「ネギ擁護論」を展開しているのである。

以上のような「水仙擁護論」と「ネギ擁護論」とは、結局、いずれかに軍配を上げるというものではなかったのだが、両者が提供した「証拠」とそれに纏わる発言とが、今日の定説を作り上げてくれたということができよう。Meic Stephens 編の *Cydymaith i Lenyddiaeth Cymru*, 1986, Caerdydd: Gwasg Prifysogl Cymru によれば、次のように記されている。

> Cenhinen. . . Y mae'r arfer o wisgo'r genhinen ar Ddydd Gŵyl Dewi (1 Mawrth) yn dal mewn bri gan y Cymry fel arwydd o'u gwlad-

©日本カムリ学会 2006
Cylchlythyr 5:10-14

garwch. (t. 83.)

ネギ...デウイの祝日（３月１日）にネギを付ける習慣は、カムリの人達によって、国を思う心の象徴として、確実に受け継がれている。

とした上で、次のように両者を認めているのだる。

Cenhinen Pedr... hwn, ynghyd â'r genhinen a'r Ddraig Goch, yw un o'r symbolau cenedlaethol. (t. 84.)

水仙... これこそが、ネギと赤き龍とともに、民族の象徴の一つなのである。

〔付記〕このような議論の中に、カムライグ語の方言や地名に関心のある筆者にとっての関心事は、Ivor B. John (1907) とArthur E. Hughes (1916) の両者が触れていることであるが、カムリ北西部のバンゴール周辺、特に Môn / Anglesea では、ネギを表すカムライグ語 'cennin' は知られていない、つまり、この地方の方言の語彙にはこの単語は含まれていない、という発言である。ネギは、英語の 'leeks' からの借用語である 'lecs' が用いられるというのである。ネギが「国章」としての地位を確保している現在では、もちろん 'cennin' がネギであり、'cennin Pedr' が水仙として使い分けをしているはずである。となれば、歴史方言学の助けを借りるより方法がない。そこで、O.H. Fynes-Clinton (1913): *The Welsh Vocabulary of the Bangor District*, Oxford University Press で調べてみると、水仙は [kinnis] の項に入っていて、[kinnis pedar] 'daffodils' (Narcissus Pseudo-narcissus); とある。その後に、'leek' に相当する語は、この地方では知られていない、とあり、/l/ の項目には [le:k], 'leak' (多分、'leek' の誤植か) が、一行含まれているだけであった。興味深いのは、本稿の冒頭でも紹介した「母親が娘に、胸に飾るのは水仙ー'daffodil' ではなくネギー'leek' なのだと教える話」は、このカムリ北西部、Anglesea 島と Bangorで聞いた話であるということである。

また、Ivor B. John (1907) は、コンウェイ渓谷下流にある教会は、辺り一面に水仙の花が咲き乱れているので、'Llanbedr-y-cennin' 「水仙の聖ピーター教会」と呼ばれていると言及している。この教会のある小村では、水仙のことは 'Blodau Dewi'「デウイの花」と呼ぶとある。そして、村の名は 'Talycafn' (地図上の地点は、23/7871ーElwyn Davies 編 (1975): *Rhestr o Enwau Lleoedd / A Gazetteer of Welsh Place-names*, Caerdydd: Gwasg Prifysgol Cymru, t. 109) であり、Melville Richards (1969): *Welsh Administrative and Territorial Unites*, Cardiff: University of Wales Press, p.201 には、旧名は 'Llanbedr-y-cennin' とある。